

クラッシュ・ブレイズ

# サイモンの災難

茅田砂胡

*Sunako Kayata*

## 立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～20頁までを収録したものです。

### ページ操作について

- 頁をめくるには、画面上の▶(次ページ)をクリックするか、キーボード上の▶キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が頁途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

DTP 挿口  
P 画 絵  
ハンズ・ミケ 鈴木理華

## 1

前代未聞の事故だった。

いくら小型の、それもかなり年季の入った近海型宇宙船とはいえ、感応頭脳が故障することも極めて稀まれなら離陸直後の宇宙船が制御不能おちいに陥って海上に不時着することも極めて稀だった。

船はそのまま海中に沈んだが、幸い着水の衝撃と水圧から船体を守る防護壁シールドはまだ生きていた。

水深が比較的浅かったことにも助けられ、真空を飛ばかぶらずの宇宙船が海の底に沈んだにも拘かわらず、乗員乗客は奇跡的に全員が無傷たった。

その後の数時間に及ぶ困難な救助活動中も船体はよく持ちこたえ、結局一人の犠牲者も出さず、乗員乗客は全員無事に海中から助け出されたのだが、

問題は事故の直前にあった。

超低空で迷走した船体の一部が海上に架けられた橋に接触・破壊するという、普通なら考えられない二次災害が発生していたのである。

ボルトン橋は全長千六百七十メートル。

セドラス半島の一部であるネリントン区とレイズ湾内にあるストー島とを結ぶ市民の交通の足だった。ストー島にはおよそ五万人が住んでいる。

朝夕の出勤時には車が列を成す交通の拠点だけに、事故の一報を受けた市警察と救助隊に緊張が走った。

無論ボルトン橋を有するレイバーン市の関係者も血相を変えて現場に急行したのである。

その時点ではボルトン橋はまだ健在だった。

肉眼で見える限り大きな異常はないように見えたが、調査機器を見た専門家は苦い顔で首を振った。

宇宙船の防護壁は橋に致命的な損傷を与えており、崩落は時間の問題だといっているのである。

ボルトン橋はただちに通行止めとなった。

事故発生が深夜だったこと、橋を渡っていた車も人もなかったのが不幸中の幸いだった。

明るくなつてくると、橋の受けた被害が肉眼でもはっきりわかるようになった。人が残っていないか確かめたいところだが、救助隊も危険で渡れない。

空から確認するのが精一杯だった。

朝陽が海に降り注ぐ頃、本格的な崩落が始まった。為す術もなく見守る人々の眼の前で、巨大な橋はゆつくりと崩れ落ちていき、凄まじい轟音とともに海の藻屑となつて消えたのである。

その頃には航宙会社の役員も駆けつけてきた。

自社の宇宙船が橋を破壊したとあつて、さすがにその足取りは重く、表情は険しかった。犠牲者への対応を考えると顔を上げる気にもなれないのだろう。しかし、ここでも奇跡的に死傷者は出なかつたと聞かされて、その顔が一気に緩んだ。

安堵の息さえ吐いて言った。

「ありがたい！ 田舎で助かりましたよ！ これが

トラウニックやアリデワだったらと思うと……」

どちらもこの惑星ユリウスの屈指の観光都市だが、今のはいささか軽はずみな発言だった。この場にはレイバーン市の関係者も大勢いたからである。

特に、ぐっすり寝ているところを叩き起こされて、否応なしにこんな事態に直面させられたレイバーン市長は不機嫌を隠さず噛みついた。

「田舎と簡単に言ってくれるがね、現にストー島の五万人が孤立しているんだぞ。この現実をどうしてくれる。ポルトン橋は二百年はもつはずの橋だった。この先二百年間、市は整備と補修予算を組むだけでよかつたんだ。それがたつたの二十四年でペアだ！ 事故対策要綱のどこにも空から宇宙船が降つてきて橋を薙ぎ倒す危険性があるなんてことは想定されてなかつたはずだぞ！」

航宙会社の役員は慌てて市長をなだめた。

「もちろん、臨時の交通手段も含めて、新しい橋の建造費は全額弊社が負担致します」

「当たり前だ！」

市長はまだ憤懣かんまんやるかたない顔つきで怒っている。

役員はそんな市長を懸命になだめつつ、あくまで低姿勢で、決して責任逃れをするつもりはないこと、犠牲者が出なかったことを喜んだのだと強調した。

「島の方たちには当面、ご不便をお掛けしますが、死傷者が出なかったことだけが何よりの救いです」  
言われてみればまったくもってその通りなので、

市長はあらためて身震いした。

不慮の事故死というだけでも市民に与える衝撃は少なくないのに、空から落ちてきた宇宙船に市民が殺されるだなんて、考えるだけでぞっとする。

海上と海中では被害状況の調査が行われていた。

念のため捜索隊も出ていたが、その隊員の一人が海から上がってきて慌ただしく報告した。

「瓦礫がれきの中に人体反応があります」

「なにっ!？」

市長は顔色を変え、無茶は百も承知で尋ねた。

「生存者か！」

「いいえ、生体反応はありません。遺体です」

航宙会社の役員も再び表情を厳しくした。

恐れていた最悪の事態である。

「犠牲者は何人ですか？」

「一人だけです」

これだけの事故で犠牲者が一人で済んだのなら、運がよかったと言うべきだ。

市長も航宙会社の役員も自らにそう言い聞かせて、回収作業の終了を待った。

しかし、数時間の業の末に引き上げられた遺体は、少なくとも今回の事故の犠牲者ではなかった。

その遺体はほとんど白骨化していた。

## 2

サイモン・デュバルは焦<sup>あせ</sup>っていた。

初めての大きな仕事控えている。厳密に言えば既に取りかかっている。監督としての自分の将来がこの仕事にかかっていると、言っても過言ではないが、撮影開始直後でも早くも暗雲が立ちこめている。

予算はお世辞にも充分とは言えず、今後の撮影に必要なロケ地すらもまだ決まっていない。しかし、それはたいした問題ではない。

その程度の綱渡りなら何度も経験している。

主演女優にも不満はない。

アイリーン・コルトはサイモンが欲しかった素材そのものだ。彼女なら大丈夫、きつとやってくれる——そう思っているが、出資者<sup>スポンサー</sup>でもある制作会社は<sup>プロダクション</sup>

サイモンの意見に真っ向から対立している。

アイリーンが人目を惹<sup>ひ</sup>くような美人ではないこと、彼女にほとんど演技の経験がないことなどを理由に、主演女優を変えるようにと強硬に迫ってくる。

頭の痛い問題なのは確かだが、サイモンは自分の直感を信じていたので、その執拗<sup>しつよう</sup>な要求をはねつけ、アイリーンで行くという主張を貫き続けていた。

演劇学校で芝居<sup>しはい</sup>を学んだ経験があれば誰でもいい演技ができるかと言えば、残念ながらそんなわけはなく、必ずしも素人<sup>しょうと</sup>が経験者に劣ると決まっているわけでもない。

アイリーンはまさにダイヤの原石だとサイモンは確信していた。経験のなさはいくらでも、現場で補えばいいのである。

そのためにもアイリーンの相手役は重要だったが、そこで少々困ったことになったのだ。

新人のサイモンには有名な役者を揃<sup>そろ</sup>えられる力もコネもない。何より金がない。

実力と知名度は必ずしも比例するわけではないが、知名度と出演料は確実に比例するのだ。

しかし、まだ世間に知られていない俳優の中にもいい役者はたくさんいる。サイモンは自分にできる限りにおいて最善の配役をしたつもりだった。

トレミー・シンガーは中央映画界では無名だが、いくつかの小さな映画賞を取ったことで、地方では注目され始めている役者だった。彫りの深い端正な顔立ちなのに悪役やら汚れ役やら、どんな癖のある役柄でもこなす演技力と存在感は確かなものだ。

だから彼に関しても不満はない。  
問題はもう一人のほうだった。

デニス・サージエントは二十歳を過ぎたばかりの若い役者だった。しかし、子役としての芸歴は長く、演技力にも定評がある。

裕福な夫。美しい新妻。その妻に恋する少年。

古典的なお膳立てである。こうした定番の設定で非凡なものをつくれるか否かはサイモンの技倆が

大いに問われるところだ。

単なるメロドラマを撮るつもりはない。

ただし、いくらサイモンが腕を振るったところで、素材である役者が悪ければどうしようもない。

デニス演じるレックスは高校二年生。

学校でも私生活でも問題など起こしたことはない優等生で、両親や教師から信頼され、同級生からも一目置かれている。年齢の割に大人びていて、一見したところは神秘的な風貌ながら内に激しい情熱を秘めている、謎めいた美少年である。

デニスは外見だけならこの条件にぴったりだった。色白の端麗な容貌は今でも充分十代に見えるし、

他ならぬサイモンがオーディションでデニスを見て、彼ならレックスをやれると確信したのである。

ところが、実際に撮影機を回してみると、どうもしっくりこない。

レックスはその魅力と存在感でアイリーン演じる主人公を惹きつけなければならぬのに、デニスの

表情はそもそも暗い。彼は『謎めいている』という部分を『陰がある』と表現してしまふのだ。

もつと表情を明るくと要求すると、とたんに顔が変わつて可愛くなつてしまふ。

そうじゃない、もつと神秘的な雰囲気を出してと言つと、今度はあからさまな狂気を漂ただよわせてしまふ。頭を抱えたサイモンはそのたびに撮影を中断して細かい演技指導を試みた。

デニスも懸命けんめいにサイモンの要求に応えようとしてくれるのはわかるのだが、肝心かんじんの結果が出ない。

いくら熱心に説明しても、デニスにはどうしてもサイモンが示すレックスの印象が掴つかめないらしい。

ついには匙さしを投げた格好で言つてきた。

「具体的な人物像モデルがいればわかりやすいんだけどな。サイモンが書いた脚本ほんでしよう？」

そう、この仕事はサイモンにとって脚本家としての初の仕事でもある。

レックスはサイモンが考えた登場人物だ。これと

言ったモデルは特にないが、サイモンが欲しいのはありきたりの高校生ではない。その場にいるだけで強烈に人を惹きつける存在感を持つ少年なのである。それをどうやってデニスに理解させればいいのか、自分の要求が難しすぎるのか、役者から望む演技を引き出せない自分の力量不足なのか、いっそのこと思い切つてデニスを切るべきか——サイモンの心は千々ちぢに乱れていた。

しかし、デニスを切るのは本当に最後の手段だ。彼はいい役者だし、サイモンのような駆け出しの監督がすぐに代わりの役者を用意できるはずもなく、制作会社もそんな予算は出してくれない。

八方ふさがりに陥おちいつたサイモンは実際の高校生を見てみようと思いついた。

自分とデニスとでは『高校生』というものに抱く印象がずいぶん違つているような気がしたからだ。

幸い、学校なら近くにいくらでもある。

ここは惑星テイラ・ボーン。

別名連邦大学だ。

サイモンの知る高校生の少年というものは学校が終われれば即行で街へ繰り出す生き物である。

その姿を捜して街に向かつている途中、高校生が大勢、校門から出てくるところに出くわした。

サイモンはこれ幸いとばかりに道端に車を止め、生徒たちの様子をじっくりと観察したのである。

サイモンの人相風体は年齢三十前後、ひよろりと長い顔に丸い眼鏡を掛けて、肩まで伸びた長い髪に無精髭を生やしている。猫背ぎみの痩せた長身で、車の中から異様に光る視線を生徒たちに注いでいる。どう鼻屑目に見ても怪しすぎる姿である。

少女たちの中には、ちらつと気味の悪そうな眼をサイモンに向けてくる子もいたが、サイモンは女の子はまったく注目していなかった。

食い入るように少年たちを見つめていた。

この時期の男の子は体格にかなりの差がある。成人と見わけがつかないくらい大きな子もいれば、

まだあどけない頬の少年もいる。

少女たちと違って少年たちはほとんどサイモンに気づかなかった。

たまに気づいた少年がいても、特に興味も関心もなさそうな顔つきで通りすぎるだけだ。

一人で下校する子もいれば、数人で談笑しながら帰る少年たちもいたが、その様子をじっくり眺めたサイモンは正直言って拍子抜けしていた。

実際に自分の眼で確認した高校生の少年たちは、予想より遙かに子どもっぽく見えたからだ。

サイモンが高校生だったのは十年も前の話だが、当時の自分は本当にこんなにも幼かっただろうか、ちよつと茫然としたくらいである。

これでは到底デニスを責められない。人は自分の知らないものを演じることはできない。

古代の兵士や独裁者など身近にないものを演じる場合は『恐らくこうだろう』と想像力で補っているわけだが、デニスの高校時代はほんの二、三年前だ。

彼は高校生というものを『よく知っている』と、自分で思っている。

その知識や経験を土台として高校生のレックスを演じているわけだから、これはやはり具体的な人物像を示せないサイモンに非があることになる。

それでもレックスの人物像は変えたくない。

今はまだ自分の頭の中にだけ存在するレックスの印象をどうすればデニスに伝えられるのか、懸命に頭を使いながら、少年たちの姿を飽くことなく眼で追っていたサイモンはどきりとした。

校門から出てきた少年の一人がサイモンを一瞥し、すぐに視線を外した。他の少年たちとまったく同じ仕草に見えたが、決定的に違っていたからだ。

その鋭い視線はサイモンを貫き、サイモンの心の奥底までを一瞬で見透かした。

大仰おおぎょうに言うなら雷に撃たれたような衝撃を覚え、呼吸をするのさえ忘れた気がした。

少年は何事もなかったように通りすぎている。

我に返ったサイモンは慌あわてて運転席から飛び出し、少年に追いつき、その背中に声を掛けた。

「きみ！」

少年は訝いぶかしげに振り返った。

こちらを見返す少年の眼を間近で見たサイモンは、今度こそ身体が震えるような感動を覚えたのである。一見したところ物憂ものうげにさえ見える、それでいて深い知性を感じさせる、冷たく整った抜群びゅうの美貌。攻撃的な様子は少しもないのに、自分よりずっと年下なのに、一歩下がって接してしまいそうになる不思議な存在感。

まさに奇跡だと思った。

この少年こそレックスそのものだ。

「きみ、映画に出てみないか？」

願ってもない素材に出会えた興奮と、この少年を逃がしてはならないと焦るあまり、ひどく直接的な言い方になってしまった。

しかし、ここは校門前の道端である。

見知らぬ男に突然こんな言葉を掛けられた少年の反応は、当然ながら冷ややかなものだった。

「警察に通報されたくなければ、ここがどこなのかよく考えてから話したほうがいい」

この警告にサイモンは歓声を上げて喜んだ。

「すごい！ きみは本当にイメージぴったりだ！」

少年の表情が険しくなったのを見て、サイモンは慌てて身分証明書を示し、連邦大学発行の撮影許可証を示し、怪しい人間ではないということ懸命に説明して、人目も憚らず夢中で話し続けた。

撮影のこと、主要人物のイメージがうまく役に伝わらないこと、その人物像がまさに目の前の少年そのものであること、思わず声を掛けたこと。

「レックスはただ成績がいいだけの優等生じゃない。頭脳明晰な犯罪者タイプなんだ。もちろん実際にはやらない。そんな真似をして経歴に傷をつけるのはばかばかしいとレックスは考えるからだ。その気になれば稀代の犯罪者として歴史に名前を残すことも

彼には簡単だけど、決して自分から進んでその道を選ぼうとはしない。そんな子なんだよ」

自分がとても失礼な台詞をしゃべっている自覚は今のサイモンにはない。

犯罪者呼ばわりされた少年は憤慨するでもなく、困惑するでもなく、ただ眼の色を深くした。

「俺は完全犯罪を企むように見えるのか？」

「そうじゃない！ きみを侮辱するつもりはない！  
なんて言えばいいのかな……」

狼狽しながらもサイモンは少年の様子にますます歓喜したのである。このくらい大人びていなくてレックスではないからだ。

「ぼくが言いたいののはつまり……きみは間違っても普通の高校生には見えないってことだよ」

言葉を選べば選ぶほど失礼の度が増していくが、少年は意外にも真面目に言い返した。

「買いかぶりすぎだな。俺はどこにでもいる普通の高校生だぞ」

「いいや、絶対に違う。きみこそぼくの探していた素材なんだ！」

サイモンは確信を込めて断言した。

「いいかい、ぼくはきみを見つけた。映画の完成が覚束おぼつかないかもしれないと頭を抱えて、車を走らせて、たまたまここに車を止めた時、きみを見つけたんだ。意味がわかるかい？ これは偶然じゃなく、こんな偶然があるわけがない！ 間違はなく運命だよ！」

少年はさすがに呆あきれた面持ちになった。

「あなたには運命かもしれないが、俺には無関係だ。第一、俺は学業で忙しい」

「わかってる。それはもちろんよくわかってるよ。

きみにレックスを演じるとは言わない。その代わり、一度デニスに会ってやってくれないか？」

訝うなずしげな表情の少年にサイモンは頷うなずいて、熱心に言葉を続けた。

「何の意味があると言いたそうな顔だね。意味なら大ありだ。デニスはいいい役者だ。具体的な印象さえ

掴めれば、レックスを演やれるはずなんだ。頼むよ！ きみという見本を彼に見せてやりたいんだ！」

「重大な問題が一つある。あなたに協力することに、いったい何の利点イブがある？」

思わぬ切り返しにもサイモンはめげなかった。

つくづくと感じ入って少年の姿を眺めた。

「きみは本当にぼくの思い描くレックスそのものだ。こうして話しているだけでもそれがよくわかるよ。

きみと他の生徒たちとは野兎のうさぎの群れに狼おおかみが一匹混ざっているくらい違うのに、野兎のほうはそれに気づいていない。同じ仲間だと思い込んですっかり気を許している。それはきみが彼らを攻撃しようとしてないせいもあるだろうが、見事と言うしかないよ。ぼくはまだ海のものとも山のものともつかない新米監督だけど、この映画には自信がある。いい作品になるはずだと思っている。だから頼むよ、協力してくれないか。撮影現場はここからすぐそこなんだ」

アイリーン演じる主人公は高校教師、レックスは

その生徒という設定なので、いくつか教室の場面シーンが必要になる。室内は模型で外観は別撮りが普通だが、サイモンは本物の学校を使ったかった。

しかし、生徒が通う現役の学校は防犯上の問題を理由に、休日であつても撮影は許可してくれない。

廃校になつて長い、朽ち果ててしまった校舎では、手を入れるだけでかなりの金がかかる。

そうしたら、アイリーンが廃校になつたばかりの古い木造校舎を知っていると教えてくれたのだ。

連邦大学テイラー・ポリンのサンデナン島にあるその古びた校舎は、サイモンのイメージにぴったりだった。

この惑星で映画の撮影が許可されることは極めて異例なのだが、サイモンはその事実を知らなかった。熱心に少年をかき口説いた。

「車で来てるからちようどいい。乗ってくれないか。デニスに会ってくれば、その後はきみの行きたいところまで送るから」

この少年が本当に普通だったら、とつづく『頭の

おかしい男につきまとわれている』と気味悪がつて、怒るか逃げ出すかしているはずだが、少年は名刺を差し出して（高校生が名刺を持つていること自体がサイモンには驚きだったが）さらに驚くべき言葉を口にした。

「明日の放課後、ここへ来てくれ」

「どうして明日なんだい？ 本当にすぐそこなのに。ちよつと来てくれればいいんだよ」

名刺を受け取りながらも不満そうなサイモンに、少年は氷のような声で言った。

「協力が欲しいと言いながらこちらの都合も聞かず、迎えも超越さなない気か？ 礼儀にかなつていない言えない振る舞いだな」

サイモンは慌てて頷いたのである。

「わ、わかった！ もちろん迎えに行くとも！」

その時の気分と言つたら天にも昇る心地だった。さつきまでの鬱屈うつくした気分が嘘うそのようである。

少年と別れ、小躍りしそうな様子で現場に戻った

サイモンを、スタッフ一同、眼を丸くして出迎えた。

監督のサイモンが若いので、現場の間も若い。

中でも助監督兼雑用係のフリップは、サイモンが眼を輝かせて語る『運命の出会い』を苦笑しながら聞き流していたが、少年の名刺を見て眉をひそめた。

「変だぜ。この住所、隣の島の学校じゃないか」

「え？ そう？」

「これだからな。少しは映画以外のことにも神経を使ったほうがいいぞ」

フリップは一応、サイモンの部下という立場だが、二人はもともと同級生だったので至って仲がいい。

また、サイモンは映画づくりに関してはともかく、それ以外はフリップが言うように、何をやらせても駄目な人間なので、実務を仕切るフリップのほうが何となく立場が強くなるのは当然とも言えた。

「だいたい、今時の高校生が道端で声を掛けた男に名刺を渡すか、普通？ 体よく追ひ払われたんじゃないのか」

「それは明日、彼を迎えに行ってみればわかるよ」

サイモンはもちろん自分で行くつもりでいたが、夜になって急な予定が入ってしまった。

一時的に撮影を離れたアイリーンから連絡があり、別の場面の撮影にサイモンが欲しがっていた条件にぴったりの場所を見つけたというのである。

これはサイモンが自分で出向いて確認しなければならぬ。やむなく、代わりに少年を迎えに行ってくれと頼むと、助監督は両手を挙げて抗議した。

「無茶言うなよ！ その子の顔も知らないのに！」

「問題ない。見れば一目でわかるよ。ぞくつとするような美少年だ」

自信たっぷりな請け合うサイモンに、フリップは非常に懐疑的な眼を向けていたが、ともかくにも車を出して少年を迎えに行った。

同じ頃、サイモンは別方向に車を走らせていた。助手席にはアイリーンが座っている。

アイリーンは制作会社が難色を示したのも領ける、

平凡で目立たない女性だった。

顔立ち自体は悪くないのだが、表情に活気がなく、黒い髪は無造作に束ねているだけで、化粧気もない。服装も素っ気ない。垢抜けないというよりは、一度会っただけでは顔を覚えられないかもしれない。

そのくらい印象が薄いのが、見逃してしまいうる地味な顔の中、眼には力があった。

サイモンはそこを見込んだのである。

もともとの目鼻立ちにはむしろ整っているのだから、化粧次第で彼女はいくらかでも美しくなれる。

低めの少しかすれた声も、ほっそりとしなやかな体つきも、サイモンのイメージにぴったりだった。

地味な女教師だった主人公は、後に夫となる男に見初められ、資産家の彼と幸せな結婚をする。

そして夫婦の新居は彼女が見たこともないような豪邸という設定なのである。できれば内装も家具も一流品を揃えたかったが、借りる予算はない。

すると、再び奇跡が起きた。アイリーンの知人が

別邸を無償で提供すると申し出てくれたのである。

「だけど、いいのかい？ 個人宅なんだろう」

「持ち主はとても気前のいい人なのよ。普段は全然使っていない家だからって言ってくれたの。それに、ここなら今の現場からもそう遠くないでしょう」

「ああ。連邦大学で撮影のほとんどが終えられればそれに越したことはないからね」

車を運転しながらサイモンは真面目に言った。

「それにしても、きみの人脈には本当に感心するよ。欲しいと思ったものが何でも手に入る」

「そんなことないわ。その人の家にはほんの短い間、臨時で入っただけなのよ。わたしのことなど覚えていないだろうと思っていたのに……」

自嘲の響きの籠もる口調だった。

「本当に思いきってお願いしてみたの。そうしたら、そちらさえよければって快諾してくれたのよ」

控えめながらも嬉しそうに微笑むアイリーンの、

サイモンは太鼓判を押した。

「きみを忘れる人はいないよ」

「あら、だって、わたしはただの掃除婦だったのよ。お金持ちにとつては掃除婦なんて、動いてしゃべる家具と一緒によ。それ以下かもしれないわ」

「だから警戒されずに相手の人柄を観察することができたんだろうな。きみには人を見抜く眼があるよ。現にその人はきみを覚えていたんだろう？」

「ええ。映画に出ることになったと言ったらとても喜んでくれたわ。応援するって」

アイリーンは裕福な家の掃除婦として働いていた。今の仕事に不満はないと自分では思っていたが、ある日、ふと何か違うことをしてみたくなつた。

部活で芝居に明け暮れた学生時代が恋しくなり、ほんの気まぐれのつもりで雑誌の片隅に乗っていたオーディションに応募してみたのだという。

そうしたら何と主役に抜擢はってきされてしまったのだ。アイリーンにとつては喜びよりも驚愕きょうがくのほうが遥かに強かつたのだらう。

その時の彼女は茫然と立ちつくしていた。

まさに素人という驚きの表情も狙っていた通りで、サイモンは履歴書りれきしょを見ながら勢い込んで尋ねた。

「ええと、ミス・コルト？ アイリーンでいいよね。掃除婦とあるけど、仕事は休めるのかな？」

質問の意味が理解できたかどうかも怪しかったが、アイリーンは呆気あっけにとられながら何とか頷いた。

「ええ、ちょうど一軒のお宅と契約が切れて、次のお仕事を捜しているところでしたから……」

「よかった！ じゃあ、すぐ撮影に入れるね？」

これは既に質問ではない。確認である。

アイリーンもここでやつと実感が湧いたらしく、青い眼を初めて興奮に輝かせて頭を下げた。

「大丈夫です。よろしくお願いします」

彼女を見込んだサイモンの眼は正しかった。

脚本の呑み込みのも早く、指示もよく理解する。昔は演劇部だっただけあって、声にも張りがあり、抑揚も利いている。表情の演技もできる。

夫役のトレミイもアイリオンには感心していた。

「いいね、彼女。素人にしてはやりやすいよ」

誰もが最初は素人である。問題は同じところから始めても伸びる人と伸びない人がいることだ。

その家はペーターゼン市の郊外にあった。

立派な門をくぐり、少し車を走らせて、ようやく家が見えてくる。大きな白い箱を積み上げたような近代的な型の家フオルムをじっくりと眺めて、サイモンは満足そうに頷いた。

アイリオンは持ち主から暗証番号と鍵を預かって、サイモンを家の中に通してくれた。

そこには外観以上にしゃれた空間が広がっていた。本物の大理石の床に、黒光りする革張りの長椅子、最高級クリスタルの机などがさりげなく並んでいる。

サイモンの眼にも、それらが単なる既製品でないことくらいは容易に見当がついた。恐らくは著名なデザイナーの作だろう。きつとてつもない値段で売買されている品に違いない。

アイリオンが微笑して言った。

「どう？ すてきでしょう。使えそうかしら」

その時のサイモンは夢中で、家の間取りや採光を確認していた。

「うん。いいよ。いかにも仕事のできる男の家って感じだ。欲を言うなら、もう少し華やいだ雰囲気があってもいいところだな。新婚夫婦の家なんだから——二階はどうなってるのかな？」

他人の家だということも忘れて階段を駆け上がり、寝室の戸棚を片端から開けて回る。彼の眼にはもう、自分の思い描く世界しか見えていない。

アイリオンは不安そうな表情を浮かべて、そんな彼の後をついていったが、遠慮がちに指摘した。

「サイモン、鳴ってるわ」

「えっ？」

「あなたの端末。出たほうがいいんじゃない？」  
言われるまで、腰に括り付けた端末が鳴っていることさえ気づいていなかった。

撮影予想<sup>ビジョン</sup>の構築という大事な作業を邪魔されて、

サイモンは苛<sup>いら</sup>立たしげに端末を取った。

「今忙しいんだよ、フリップ。後にしてくれないか。」

——何だって?!

突然サイモンの声がはね上がった。

「何だよそれ! どういうこと?! ちょっと待て!

すぐそっちに行くから!」

大声を上げて慌ただしく端末を切ったサイモンに、

アイリーンは驚いて声を掛けたのである。

「どうしたの?」

「わからない」

サイモンは険しい顔で首を振った。

「撮影ができなくなるかもしれないって言うんだ。」

「どういふことなのかさっぱりわからない」

「フリップは今どこにいるの?」

「レックスを迎えに行かせたんだよ」

「レックス? レックスはデニスでしょう?」

事情を知らないアイリーンは困惑した顔だったが、

サイモンは我に返って叫んだ。

「こうしちゃいられない! すぐに行かなきゃ!」

「待って、サイモン。お願いだからちゃんと話して。」

「いったい何があったの?」

「それはこっちが訊<sup>き</sup>きたいよ!」

サイモンは屋敷を飛び出し、アイリーンを乗せて大陸間横断道路を目差したのである。

約二時間後、サイモンの運転する車はフリップを向かわせた学校の校門前に到着していた。

サイモンは急いで車から降り、同じく助手席から降りようしていたアイリーンを止めたのである。

「きみはここで待っていてくれ」

主演女優はさすがのような眼で監督を見た。

「お願い。一緒に行ってもいいでしょう?」

「だめだよ。これは女優の仕事じゃない。それに、第三者がいると話がこじれるかもしれない。ぼくが戻るまでじっとしていてくれ。いいね」

忙しく言い置いてサイモンは構内の受付に向かい、

職員案内で立派な部屋に通されたのである。

そこには厳めしい顔の男性が二人待っていた。  
泣きそうな顔のフリップもいた。

事情のさっぱりわからないサイモンが勧められた椅子に座った直後、廊下から「失礼します」と声が聞こえ、紛れもなく昨日会った少年が入ってきた。大人たちに遠慮してか、少年は腰を下ろそうとはしなかった。大人二人もそれをよしとして、一人がおもむろにサイモンに話しかけてきた。

「ミスタ・デュバル。わたしは当校の校長を務めるベネディクト・オーデイン。こちらは連邦大学倫理委員会の代表としてこの席にいらっしゃるミスタ・アレン・バーナビーです」

「校長？ 倫理委員会？」

眼を丸くしたサイモンに、隣のフリップが小声で囁いてきた。

「サイモン。おまえの目利きには感心させられるよ。彼は確かにレックスそのものだ」

人は言葉の内容よりも、相手がその言葉を発した時の口調や表情・態度を重視する生き物である。

美しい女性にっこり微笑まれながら悪戯っぽく、『あなたなんか大嫌い』と言われたら、たいていの男は悪い気はしない。むしろ笑み崩れるだろうが、今のフリップの口調はその真逆だった。

体裁は誉め言葉でも、恐ろしく苦々しく忌々しい感情が籠もっている。さすがのサイモンも、ここで自分の目利きを自慢する気にはなれなかった。

オーデイン校長があらたまつて言う。

「ミスタ・デュバル。あなたは昨日、サンデナンの道端で、当校の生徒に、自らの制作する映画作品に参加するよう協力を求めた。これは事実ですか？」

ぽかんと間抜け面を晒したままサイモンが頷くと、校長先生と倫理委員は無言で顔を見合わせた。

その横に立った少年が淡々と、しかし堂々とした口調で言った。

「昨日、大学発行の撮影許可証について調べてみた。

この許可証は当惑星の学生及び生徒の学業もしくは私生活に差し障りのない範囲において有効だとある。言い換えれば、許可を得た人間が学生・生徒に対し、悪影響を及ぼすと判断される行動に出た場合、この許可証はいつでも取り消せる。俺はその条文に従い、サイモン・デュバルとその撮影班に与えた許可証の即時取り消しと、この惑星からただちに退去させることを大学倫理委員会に提言した」

「えええっ!?!」

サイモンは仰天した。

思わず椅子から立ちあがって大声で喚いた。

「待ってくれよ！　なんでそんな話になるんだ!?!」

オーディン校長が苦い息を吐いた。

「ミスタ・デュバル。お掛けください」

「何なんですか、退去って！　そんなこと言われて

黙っていられますんよ!」

「ミスタ・デュバル」

校長の声が陰しくなった。

「あなたはご自分が今どんな立場に置かれているか、理解されていないようですね」

バーナビー氏も顔をしかめている。

「我々はあなたの熱意に打たれ、あなたを信用して撮影許可を与えたのです。ところが、あなたはその信頼を無惨に踏みにじった」

「してませんよ！　そんなこと!」

「当惑星に在籍するすべての学生及び生徒は勉学に集中する権利を保障されています。許可証発行時に詳しく説明したはずですが、意味はわかりますかな。我々はあなたに学生や生徒たちには関わらないこと、彼らの勉強を妨害しないことを求めたんです」

「ですから妨害って何なんですか!?!　麻薬か何かを勧めたみたいな言い方をするのはやめてください！　ぼくはただ撮影に協力してくれって——!」

「彼は拒否した。そうですね?」

「ですけど!」

「『はい』か『いいえ』でお願いします。あなたの

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF形式で、作成されています。この続きは書店にてお求めの上、お楽しみください。